交流文化学会　新体制始まる!

交流文化学会では、11月17日に引き継ぎセレモニーを行い、新体制が始まりました。
今回は、新委員長になった西尾朋輝君および委員会等の代表者の方々にインタビューしました。

執行部学生委員長：西尾 朋輝君

Q 委員長になったきっかけは何ですか。

大学に入学する際に、他学年の学生と交流を持ちながら、学部のために活動できたらいいなと思っていたことから、執行部に所属することを決めました。2年生になり、学会担当の加納先生にこんな学会を作れたらいいなという話をしたところ、委員長をやってみないかというお声がけをいただき、立候補しました。

Q 執行部に入って得られるものは何ですか。

たくさんの経験だと思います。一つのイベントを企画し、実行に移すまでの過程では、先生方からアドバイスをいただきながら、学生が主体となって準備を進めます。そして、何よりも学会は、自由度の幅が大きいため、多様な活動を行えることが強みで、新しい価値観や概念を学ぶきっかけにも繋がります。

Q 最後に、交流文化学部の学生にメッセージをお願いします。

交流文化だよりをご覧いただき、ありがとうございます。この度、委員長を務めることになりました、国際交流・観光専攻2年の西尾朋輝です。これまで、コロナ禍ということで、なかなか活動ができていなかったのですが、反省点を生かして、みなさんにとって学会が少しでも身近な存在になるよう、努力していきます。まだまだ成長過程である学会ではありますが、よろしくお願いいたします。

SDGs 委員会代表：河合 壮馬君

Q 活動内容を教えてください。

今までは企画を立てても、コロナを言い訳に行動に移すことができていませんでした。学会のモットーは、学生を巻き込んで活動すること!　まずは行動ということで、すぐに取り掛かることができるゴミ拾いを始めました。加えて、SDGsに取り組んでいる方をお呼びして講演会や交流会を開いたり、SDGsに力を入れている企業に取材をしに行ったりと、楽しみつつSDGsと真剣に向き合える活動をしたいと思っています。

Q どんな人に入ってほしいですか。

SDGsについて全く知識がないという人こそ入ってほしいです。僕たちもSDGsについて知らないことだらけ!　委員会というコミュニティを利用して、楽しみながら一緒にSDGsについて勉強しましょう。もちろんSDGsに興味がある人も、友達づくりや学年を超えて縦の関係を築けるような場所がほしいと思っている人もお待ちしています!

エアライン＆エアポート研究会代表：今井 美羽さん

Q 11月に行われたエアライン&エアポート研究報告会とは、どのようなイベントですか。

航空業界に関連した知識を楽しく学ぶことを目的としたエアライン&エアポート研究会初のイベントでした。二部構成となっており、第一部では私たちの研究の成果を発表し、第二部では現役パイロットの方をお呼びして講演会を行いました。

Q 初のイベントの感想を教えてください。

自分たちの想像以上に沢山の学生が本イベントに関心をもって参加してくれたことが大変嬉しかったです。そして、イベント後に研究会に入りたいと言ってくれた学生もいて、本イベントが開催されなければ出会わなかったであろう、航空業界に関心がある同志に出会えたことに感動しました。

留学生別科交流会代表：小澤 彩加さん

Q 9月に開催した「名古屋街歩き」について教えてください。

これから留学生が過ごす名古屋の歴史や魅力について伝えながら、名古屋の名所を巡り、留学生に楽しく名古屋を知ってもらうためのイベントを開催しました。一緒に食べ歩きをしたり、お互いの話をしたりするなど、イベントの主催側と参加者という関係ではなく、友人のような関係で楽しめたことが1番良かったと思います。準備が大変でしたが、その分得られるものも多かったです。

Q 「名古屋街歩き」を通して得られたものは何ですか。

やりがいです。何度も下見に行くなど、初めて交流する留学生にこのイベントを楽しんでもらうために、準備に時間を費やしました。当日まで不安もありましたが、みんなが楽しんでいる様子を見て、不安が喜びと安心感に変わった時、やり遂げた達成感を味わうことができました。

上記の委員会等に興味のある方は、アドバイザーの先生に相談していただくか、委員会等の活動をしている学生にお声がけください！

今号は私たちが作りました!	交流文化だより編集委員	坂田　彩寧（3年）、三島　なつき（3年）、宮澤　怜奈（3年） 鈴木　郁実（2年）、伴　真耶加（2年）、山田　隼右（2年）

交流文化だより

2023.1.10 WINTER 第19号

愛知淑徳大学交流文化学部　https://www2.aasa.ac.jp/faculty/koryu/

編集・発行　交流文化学会　運営委員メンバー&有志
「挑戦する学生を応援！　The Beginning号」として、お届けします。

おかえり！「淑楓祭」

～3年ぶりの対面開催!　立役者たちにインタビュー!～

実行委員会

Q 今年度の淑楓祭テーマは何ですか?

「Re:」。コロナ禍で失われた時間や、地域の人々との交流などを再び取り戻すという思いや、オンライン形式だったコロナ禍を乗り越えて、「もう一度」自分たちの学祭を取り戻そう!　という意味を込めてつけられました。

Q 実行委員はどんな人に向いていますか?

学祭では、自分がやりたいことを積極的に提案すれば意見を聞いてもらえることが多いです!　何でも主体的に取り組むことができると、学祭ライフをもっと楽しめると思います。大勢で協力して何かを創りたい人、人と出会うのが好きな人、人と話すことが好きな人、どなたでも活躍できる場面が必ずあります。

Q 淑楓祭に込めた想い、やりがいは何ですか?

3年ぶりの対面開催ができる嬉しさと、不安でいっぱいでした。1～3年生は誰もコロナ前の淑楓祭を経験していないため、不明瞭さが不安になり、その不明瞭さを払拭すべく自分たちなりにできることを早めにしました。実行委員のやりがいは、努力し続けるといつかは実ることが体感できるところです。大学生には慣れない企業へのメールや電話かけ、後輩への指導や大学との協議、企画書や申請書の作成など、通常の大学生活では味わえない努力が学祭には詰まっています。1つ終わっても、次に2つ、3つと課題や指摘があり途方もない道のりと感じますが、本祭日が近づくにつれて今までの努力が追い風になるような感覚があって、本祭中には言葉では言い表せないほどの達成感に包まれます。

Q 来年度の淑楓祭についての意気込みを教えてください。

来年度は、コロナ禍以前の活気のある模擬店や、制限人数を緩和しさらなる来場者を見込める学祭の企画を考えたいです。模擬店完全復活をめざして、頑張ります!

出演団体に聞いてみた!

CCC 団体：チームわんわん

Q 日頃の活動内容を教えてください。

私たち「チームわんわん」は、現在13人（長久手11人、星ヶ丘2人）で活動しています。毎週火曜日と水曜日の昼休憩の時間にCCCにて、イベントで何をしたら参加者に介助犬について楽しく学んでもらえるのかを話し合っています。長久手キャンパスとのミーティングはTeamsを用いて行います。今後は、福祉の大学生向けイベントと小学生向けイベントを行う予定です。

Q やりがいは何ですか?

参加してくださった方々が介助犬の話を熱心に聞いてくださり、「勉強になる!」「介助犬について知れて良かった!」などの感想をいただけた時が1番嬉しいです。

Q 淑楓祭の出し物は、どのような目的がありましたか?

淑楓祭では、「子どもから大人まで、楽しく介助犬について知ってもらうこと」を目標とし、介助犬クイズと日本介助犬協会のグッズ代行販売を行いました。クイズを通して地域の方々とコミュニケーションすることができました。

Q 交流文化学部の学生に向けて一言お願いします!

私たちと一緒に介助犬を広めてみませんか?!　少しでも気になった人はCCCまで連絡を待っています!

出演団体：チア

Q 日頃の活動内容を教えてください。

こんにちは、Rangersです!　チアリーディングとは見てくれる人に元気、勇気、笑顔を与えるスポーツです。大会やイベントに向けて日々練習に励んでいます!　大学以前からチアをやっている人と、大学から始めた人が半分ほどの割合で、誰でも挑戦できるスポーツです!

Q やりがいは何ですか?

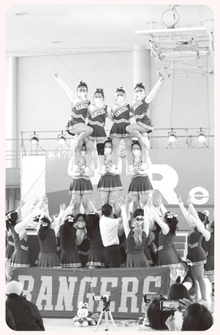
チアリーディングは、4、5人で1つの技を作ることが多くチームワークが大切です。だからこそ些細なことでもできるようになったことを一緒に喜び合うことができ、かけがえのない達成感を得ることができます!

Q どのような思いで淑楓祭に出演しましたか?

笑顔が溢れる淑楓祭になるように、見ている人たちを私たちの演技で元気づけたい、楽しんでほしい、という気持ちで演技しました!

Q 交流文化学部の学生に向けて一言お願いします!

チアリーディング部の中で交流文化学部の学生が1番多いです。同じ学部の友人や先輩後輩が沢山できることは間違いなしです!　最後の青春、ぜひ一緒にしませんか?



フィールドスタディへ行こう!

コロナ禍で行うことができなかったフィールドスタディ(以下FS)。今回は、今年度ようやく実施することができた3つのFSの担当教員と参加学生にそれぞれインタビューを行いました!

質問項目

教員
①なぜその地域に行こうと考えたのですか。
②今回のFSでの1番の思い出は何ですか。
③FSを通して学生にどのようなことを学んでほしいですか。
④FSを通して学生にどのように成長してほしいですか。

学生
①FSで何を学びましたか。
②どんな魅力がありましたか。
③このFSで1番印象に残ったことは何ですか。

伊根町フィールドスタディ

●担当教員:前島先生

①大学院の後輩が地域おこし協力隊となり、伊根町に移住していて、伊根町のお話を聞く機会がありました。そのお話を聞いて、学生たちを連れて行きたいと思いました。

②ゼミもそれぞれ全く違う学生たちがFSを通して元から友達だったのではないかというほど仲良くなってくれたことです。

海上タクシーに乗った時の写真。
伊根町の風景に癒されながらドライバーの方に伊根町のお話をお聞きしました。

③FSでは現地に行かないとわからないような裏を学ぶことをできるため、現地で直接話を聞いて、観光地でない地域の課題を学んでほしいです。

④FSは、接点がなかった人たちと関わることができ、交流の幅が広がるため、人間関係の新しい発見をしてほしいです。いろんな人がいるということに気づくチャンスがあります。

●参加学生:交流文化学部3年 鮫島萌花さん

①失敗してもチャレンジし続けることの楽しさ。伊根町では現地の子どもたちにインタビューをしましたが、その際にトラブルがありました。しかし、「成果が出せないままFSを終わりたくない」という気持ちで自由行動の時間を潰して調査に励みました。このインタビューを通して、地域の繋がりが濃いことや輪が広がることに面白みを感じました。
　課題であるアンケート作成時には、現地の人の視点と私たちの視点の違いを発見することが何よりも楽しく、今後も心が折れてもやり遂げようと感じることができました。
　また、新しい出会いの大切さを知りました。参加学生はほとんど初対面でしたが、先輩後輩混じって、共通の話題を話し合えたことが自分の成長に繋がりました。

②綺麗なエメラルドグリーンに輝く海は流れも穏やかで、その海の上に浮かぶように舟屋が広がっていました。夜の伊根町は私たちの暮らしている町とは異なりとても静かな空間でした。そんな伊根町の魅力を知って、非日常を体験できました。

③印象に残ったことは、自由行動を削って調査をし続け得られた達成感であり、それは私の宝物になりました。

四国フィールドスタディ

●担当教員:杉本先生

①香川県の小さな島々ですが、その小さな島々は、現代アートによって世界的に有名になった珍しいケースであるため、そこから多くのことを学ぼうと思ったからです。

②暑い中、3つの美術館を巡るために学生たちと直島を沢山歩いたことです。また、直島にある沢山の飲食店の中で唯一営業していた食堂で学生たちとヒラメの唐揚げを食べたことです。

田島さん撮影
みんなで花火をした時の写真。

③アートって何だろう?という出発点に戻って、アートに貪欲に親しむようになってほしいです。

④旅や活動を通して仲間や友人を作り、その絆を大切にするような人になってほしいです。

●参加学生:交流文化学部3年 畔柳 栞さん・田島 里帆さん

①**畔柳さん:**美術を鑑賞する時に、説明の有無で見方が大きく変わるなと思いました。
田島さん:作品の知識を入れておくと、とても楽しむことができることを学びました。

②**畔柳さん:**フェリーから見る広い海や島々、寝る前の波の音、沢山の木々がとても綺麗で空気が澄んでいました。普段味わうことのない自然を体験して癒されました。また、普段話すことがなかった子とお話しできたり、友達と4日間過ごすことができたり、楽しい時間を過ごせることも魅力です。
田島さん:着く前から海が見えて、空気が澄んでいました。2泊目はトレーラーハウスで宿泊しましたが、夜になると鳥の鳴き声、波の音が聞こえて自然を堪能できました。

③**畔柳さん:**地中海美術館の作品。驚くような作品や存在感のある作品等、さまざまな作品に触れることができ、面白かったです。
田島さん:美術館を巡り、作品が不思議に思えたり幻想的に見えたりと、さまざまな感性が芽生え、日々の日常生活では体験できないことを体験できました。

北海道フィールドスタディ

●担当教員:大堀先生

①日本を代表する観光地であり、観光庁認可の「観光地づくり法人」の方が前の職場の大先輩で、北海道に精通されているからです。

②コロナで実施できずにいましたが、今回念願叶い初めて学生のみなさんと研修に行けたことです。また、ほぼ全日晴れだったことです。

③札幌や小樽だけでなく、帯広やひがし北海道などディープなエリアを見ることで、本当の北海道の良さを知ってほしいです。そして、現地の人がどうやって私たちに情報を届けているのか、誘客のための努力と苦労を知ってもらえると何よりです。

④旅の3分動画(事後課題)を通じ、現地の方にはみなさん世代の行動を知る機会となり、みなさんには熱を込めて「人に思いを伝える」ことができるようになってもらいたいです。

重松さん撮影
摩周湖。「霧の摩周湖」と言われるほど霧で見えないことが多いそうですが、行った時は晴天でとても綺麗に摩周湖を見ることができました。

●参加学生:交流文化学部3年 重松伊吹さん・浅香希実さん

①**重松さん:**観光地の魅力を発信することの難しさを学びました。FS 後の課題に3分動画の作成がありましたが、北海道の大自然の魅力を伝えるのにとても苦戦しました。自分たちが感動した場面の写真や動画が残っていなかったり、言語化することが難しかったりと、伝えたくても伝えきれないもどかしさが残りました。
浅香さん:自由時間には自分たちの行きたいところに行きましたが、思っていたところと違ったことがあり、旅行をする上での下調べは大切だと思いました。

②**重松さん:**非現実的な体験ができました。道中にシカやキツネ、ツルに高頻度で遭遇したり壮大な自然を見られたり、普段体験できないことの連続でした。北海道はとても広いですが、札幌、小樽、富良野、ひがし北海道と広範囲を回ることができ、都会と自然のどちらの魅力も感じられたことがとても良かったです。
浅香さん:食べ物が素材の味を生かした味付けで、今でもふと思い出して「もう一度食べたいな」と思うほど美味しかったです。

③**重松さん:**帯広の馬車 BAR。とても綺麗でオシャレな馬車に乗って帯広の街を案内してもらうのですが、ばんえい競馬場で実際にレースに出場していたとても大きな馬が引率してくれるため迫力がありました。市民のみなさんは当たり前のように手を振ってくださり、人の温かさも感じることができ、大変貴重な体験でした。
浅香さん:緑が永遠に広がる広大な土地。その美しい景色に、本当にここは日本なのかと驚きました。バスで移動をした際、市内を外れると山や田んぼで、風景がガラッと変わるため、バス移動の時間も退屈しませんでした。

私たちの大学をいつも綺麗にしてくださっている清掃員の酒井智子さんにお話を伺いました!

清掃員のみなさんは、私たちが登校する前の早朝から帰宅後まで、教室やラウンジ、廊下など、大学の隅々まで掃除してくださっています。業務時には、廊下ですれ違う際など、挨拶や会釈をしてくださる場面に多く出くわします。「お客様に対しての挨拶」を社訓にされているようで、日頃の挨拶を忘れている学生に対して、挨拶の大切さを伝えるためにも、自ら進んで挨拶や会釈をされているそうです。また、学生からの挨拶は「日々の活力、エネルギーになっている。挨拶をしてくれるおかげで掃除を頑張ろうという気持ちになる」とおっしゃっていました。
　清掃員のみなさんへの感謝の気持ちを忘れず、私たちも積極的に挨拶をしていきましょう!